

またこの測定方法は、大気中の炭素の14C含有率が過去数万年の間、一定不変であるとする仮定のうえに立脚している。

しかるに二酸化炭素が構成する14Cは気候条件の変化によって、二酸化炭素が大量に海水中に溶けこんだり、海水から発散したりすることによって当然その含有率も二酸化炭素の量の変化とともに変化することになる。このことが測定された年代に誤差を生む一因になっている。

昭和五十二年八月津軽半島の蟹田町の大平山元遺跡から石器製作工場が発見され、地層等の研究から一万二千年前の遺跡と判明した。

(人類は約七万年以前に石器を創造し、火を知り、四万年以前には絵を描いていたと立証する学者もいる。)

第一は、津軽半島の中北部、むつ湾寄りの東丘陵地に工場跡がある。

第二は、同遺跡から本県最古の縄文草創期と判断される平底の無文土器が発掘確認されている。

第三に、すぐ近くの太平グラウンド遺跡跡からは、縄文時代前期ころと思われる円筒下層式土器等の破片が採集されている。

縄文時代の前期が円筒土器下層式と深郷田式(中里町深郷田遺跡)がある。

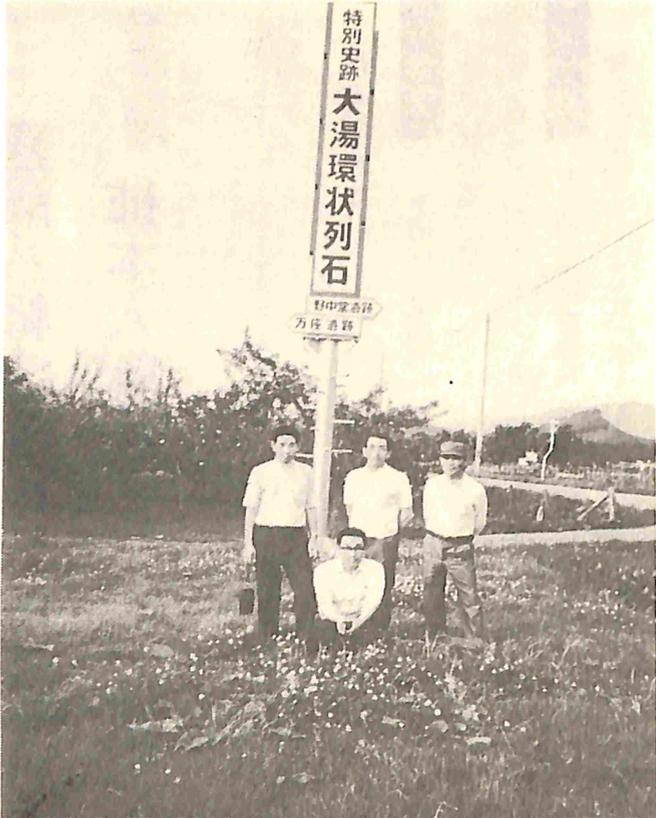
中期は三千年〜二千年前で円筒土器上層式、後期は二千年〜一千年前で十腰内式(金木町神明町遺跡)の土器でカメ棺土器や石棺墓の墓制を発達させ安定した縄文社会が確立した時期でもある。亀ヶ岡は晩期である。

縄文時代前期から中期に形成された円筒土器文化と晩期の亀ヶ岡文化は、約一万年にわたる縄文文化の到達点でもあり、高度な技術と文化が結実して「縄文文化の華」と学界からも賞賛されている。円筒土器文化

定説があるわけのものでもない。従来の考古学の研究によれば、アジア大陸から日本に或る民族が移動して来て津軽に居住したものとせねばならぬ必要もない。即ち縄文時代という関東方面の研究にのみたよる先入観をすてて環状列石時代人の活動について研究考察の必要があるということだ。

そして、エジプト文化の紀元前六千年、中国文化の紀元前五千年以上について、その年表等にも考察の必要があると思う。

風が出てきたのか、雑草木生え茂る中に、老松は淋しくないが、その下に並ぶ群石は、史実を物語りげであった。



は、後氷期の日本列島の気候がもっとも安定した時期に力強く発展し、その土器に施文される縄文はよく工夫されて「縄の至芸」と評価されている。

さて、話は横道にそれたが小牧野環状列石や、大湯環状列石のように壮大な遺構は、我が国に於ける考古学場の遺跡として稀有のものであり、東北地方に於ける古代文化の地位を明確にする上にもきわめて重要な遺跡といわなければならない。

「環状列石は、単に縄文式、弥生式というような型にあてはめて研究を進めてゆくわけには行かないのではないか。環状列石時代があった事を認めて研究を進める必要があると思われる。」との大湯郷土研究会の説が、今思い起こされ、縄文文化時代の遺跡だときめつけての研究は、完全な研究方法ではないような気がする。

学者によっても、大湯環状列石建設年代はまちまちである。三千年前よりも後のもの、六千年前にさかのぼるものなどである。とにかく土器のみによる推定、一つの手がかりではあるが、未だ完全なものとは考えられない。

私は素人であり、異説を論ずる気はないが、日本の東北地方に六千年以上の文化が存在するか、どうかは疑問に思う。

エジプトの文化は六千年から七千年前からであり、中国の文化も五千年以上はほけてくる。

もしも日本に六千年以上の文化があったとすれば、まずエジプトの文化の年代をもっと上代に遡らせ、中国の文化の紀元を更に上代にのぼらせてからでないと納得できなくなる。という説を固定するのではない。日本の縄文文化時代がこれらの民族より後代と定めねばならぬという

金木町の主要な遺跡

相野山遺跡(旧石器時代) この時代の遺跡は、青森県で現在まで発見されたのは十二か所と他県より少なく、そのなかでも発掘調査による石器の出土は、東郡蟹田町大平山元などわづか四遺跡に過ぎず、そのなかに当町喜良市、相野山遺跡がある。更生部落の東北方二・八軒、通称「マハゲ」付近に所在する、昭和四十二年、名久井氏と金木高校郷土研究部員によって発見された。石器は尖頭器(手に握って動物を突くか、柄を付けて槍とし、突くか、投げて獲物を捕獲する)、その他彫器、削器(捕らえた動物の骨ならびに角を加工するのに用いられる)等、旧石器時代晩期のもので、約一万年前のものと思われる。

芦野七夕野遺跡(縄文文化時代) 旧石器時代に続く縄文時代は氷河期が過ぎて地球上が暖かくなりつつあった時期であり、約一万年から二千年前におよぶ長い年月が含まれている。古い方から草創期↓早期↓前期↓中期↓後期↓晩期の六期に分けて、文化発展のものさしとしている。青森県では旧石器時代の石器が発見されているのに、後続する草創期の土器の出土がない、芦野七夕野遺跡より出土したのは、縄文、前、中期の円筒はもちろんのこと、その前段階早期約五千年前に位置する土器も発見され、中央学会にも発表されている。

その他の遺跡として、金木一号(前期)へび沢(前・中・後期)妻ノ神一号(中・後期)妻の神二号(前・中・後期)三ノ沢溜池(中・後期)千苅(晩期)などがある。

嘉瀬八幡宮境内に鎮座奉仕せる人丸神石碑に寄せて

柿本人麿呂（下編）つづき

外 崎 三千男

作家解義（四）

万葉集 巻第四（承前）

柿本人麿の歌三首

501 をとめらが袖布留山のみづ垣の久しき時ゆ思ひき吾は、

大意 おとめ達が袖を振る、そのフルという言葉のつく布留山の、
神の社の垣の古いように、久しい前の時から、恋い思って居りました。

502 夏野行く小鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや

大意 夏の野を走る小鹿の角のように一にぎりばかりの短い間
も、妹の心を忘れては思わない。

503 玉衣のさるさる沈み家の妹に物言はず来て思ひかねつも

大意 美しい衣のさやさと音を立てるように、気が沈んで、
家の妻に言葉をかけずに来たので思いこらえられない。

柿本人麿の歌集より

川を詠む

1101 纏向の穴師の川ゆく水の絶ゆることなくまた帰り見む

大意 纏向にある穴師の川を流れ行く水のように、絶えること
なく、来て見よう。

1102 ぬばたまの夜さりくれば纏向の川音高しもあらしかも疾き

大意 夜になって来ると、纏向の川音が高い。山のあらしが烈
しいのであろうか。

以上で「万葉集」に掲載の柿本人麿の作歌に成る「長唄」及び「短
歌」の全部に亘る「解義」は終わったわけである。依って以下は別本
「柿本人麿の歌集」に登載のものを順々にその「解義」を行うものと
する。

1 弓削皇子に戯れる歌一首
御食向ふ南淵山の巖にはふれるはだれか削え遣したる

大意 南淵山の巖には、降った斑ら雪が消え残っているのであ
らうか、花がそのようにも見える。

2 弓削皇子に献上の歌一首
神南備の神依板にする杉の思ひも過ぎず恋のしげきに

大意 忘れる時はない、恋の茂きに依って。

3 たらちねの母の命の言なれば年の緒長く憑み過ぎむや

大意 母の命の許しての言葉であるから、年長く空憑みをさせ
ることがあろうか。そうした事はない。

4 泊瀬川夕渡り来て我妹児が家の門に近づきにけり

大意 泊瀬川を夕べに渡って来て、今は妹が門口に近づいたこ
とである。

5 雪こそは春の消ゆらめ心さへ消え失せたれや言も通はぬ

大意 雪こそは春日には消えよう、心までが消え失せたのであ
らうか、使さえも通って来ない。

6 妹等許いまきの嶺に茂み立てるつま松の木は古人見けむ

大意 木の嶺に茂っている松の木は、古への人は見たであろう。

7 宇治の若郎子の宮所の歌一首
黄葉の過ぎにし子等と携はり遊びし磯を見れば悲しむ

大意 紀伊の国にて作れる歌四首
死んだ妹と睦しく連れ立って、遊んだことのある磯を見
ると悲しい。

8 塩気たつ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹がかたみとぞ来し

大意 潮煙の立つ荒涼とした荒磯ではあるけれども、死んだ妹
の形見と思っては来た。

9 いにしへに妹とわが見し黒玉の黒牛瀉を見れば悲しむ

大意 過ぎし時に妹と我と見たことのあった黒牛瀉（今の和歌
山県海草郡黒江町の海）を、今一人で見れば、楽しくもない。

10 玉津島磯のうらみの真名こにもほひて行かな妹の触りけむ

大意 玉津島（和歌山県海草郡和歌の浦の中にあつた島のこと）
の磯の浦わたりの真砂に、我が袖を染めて行こう、妹がその真砂に
触れたであらうに。

11 久方の天の香具山この夕べ霞たなびく春立つらしも

大意 天の香具山に、この夕べは霞がたなびいている。それで
見ると、春が立つようである。

12 巻向の松原に立てる春霞おほにし思はばりなづみ来めやも

大意 大方に妹を思ふのであれば、道の苦勞をして来ようかは、
来はしない。

13 古への人の植えけむ杉が枝に霞たなびく春は来ぬらし

大意 昔の人の植えたであろう所の杉の木その枝に、霞がた
なびいている。それを見ると春は来たのであろう。

14 子等が手を巻向山に春去れば木の葉しぬぎて霞たなびく

大意 巻向山に春が来ると、木の葉の隙を貫いて、深くも霞が
たなびく。

15 玉蜻夕さり来ればさつ人の弓月が岳に霞たなびく

大意 夕べになれば、弓月が岳に霞たなびく。

16 今朝去きて明日は来牟等伝子鹿丹旦妻山に霞たなびく
大意 朝妻山(奈良県葛上郡にある山)に煙がたなびいている。

17 子等が名に懸けの宣しき朝妻の片山ぎしに霞たなびく
大意 愛する妹の名として口に云うによい朝妻の山の、その断崖に霞がたなびいている。

18 春日野の犬鷲のなき別れかへれます間も思ほせ吾を
大意 春日野にいる鷲の仲間の如く泣き別れをして、家へ帰りたもう間でも、思い給えよ吾を。

19 冬ごもり春咲く花を手折り持ち千度の限り恋ひ渡るかも
大意 春咲くめだたい花を手折って持つと、それと共に思っている女を思い出し、相共にそれを愛でたいと思つて、限りなくも恋いつづけることである。

20 春山の霧に惑へる鷲も我にまさりて物思はめや
大意 春山の霞に道を失つて、惑つて鳴いている鷲も、自分まさつての嘆きをしているものであろうか、無い。

21 出でて見る向ひの岡に本繁み開ける在花のならずば止まじ
大意 此の恋を遂げずには止やめまい。

22 霞立つ春の永日を恋ひ暮し夜のふけゆきて妹にあへるかも
大意 霞の立つ春の、永い一日を恋つて暮らして、夜が更けて妹と逢つたことである。

23 春されば先づ三枝の幸くあらば後にも逢はむな恋ひそ吾妹
大意 無事でながら居る限りは、今は兎もあれ、後にも逢

おう。そのように恋うな吾妹よ。

24 春さればし垂柳のとををにも妹が心に乗りけるかも
大意 春が来ると、しだれる柳のように、撓むまでに、妹は心に乗っていることではある。

以上。

河童(かっぱ)

私たちが子供の頃、溜池や川で水遊びしていると、「かっぱネカテ、捕ワレルネ」「足引ッバラレルネ」と、おどかさされたものである。いわば「かっぱ」は、日本の妖怪の中で最もよく知られているもの一つで、水中に住み、子供達を襲う最も恐ろしい動物であった。

津軽地方で「かっぱ」を「しいっこさま」というのは、水虎のこと、石像や木像の「かっぱ」を社寺の境内などに祀っている。

河童の形状や性質は、土地によって多少異なるが、童形で頭髪をいわゆるおかっぱにして垂れ、頭上に皿があって水をたたえていることは、だいたい共通している。

この水がなくなると「かっぱ」は威力を失うという。江戸では「かっぱ」の身体は灰色をしているといったが、東北地方では顔が赤いといっている。なまぐさいにおいがし、鳥のような足跡をつけるという。「かっぱ」の腕は左右一本に通っている。

「かっぱ」の特色の一つは角力(すまう)を好むことである。負けているうちはよいが、こちらが勝つと不機嫌になる。「かっぱ」はキュウリが好物で、「かっぱ」を祀るのには、これを供える。キュウリを食べて水に入ると害されるという。

「かっぱ」は人の尻子(しりこ)を抜くといわれ、水難者の肛門のあいだに「かっぱ」にとられたのだという。(世界事典)

今では時代も変わり、河童はマンガの世界にのみ存在するようだ。

— K —

むらの出来ごと

(古老の話を取材)

○ 雨乞い祭り

嘉瀬には、古くから雨乞い祭りがあり、ごく最近まで続けられていました。

雨が幾日も降らず水が不足すると、農作物を旱魃から救うため神様に雨を降らせてもらうためのお祭りなのです。

小田川上流の藤の滝の上にあるお宮の境内に関係者一同が集まり、僧侶二人がお経をあげるなか、赤子を入れたエンツコに縄をつけて、滝の上からしづしづとおろすのです。(勿論藁人形)

集まった人々は、一斉に泣き始めます。それが滝の音と唱和して一大狂騒曲となり、たちどころに靈感あらわれ、雨が降ってくるのです。

古老の話によると二度程、雨が降ってきたということですから不思議な祭りです。

○ 古町の大火

明治三十七年旧三月二十四日午後五時頃、下古町内海勘次郎さん宅より出火おりの南風にあおられ、火はたちまち燃え拡がり、北はづれの鳴海万次郎さん宅まで住宅十八戸、米蔵四棟、物置など焼失した。

○ 郷蔵破り事件

明治三十九年八月二十五日(旧七月七日)現在の岩村金致さん宅附近に建てられてあった郷蔵が破られる事件が起こりました。

二年続きの凶作で 食糧のない農民たちが「先祖から貯えてきた米を食べさせる」と、ときの村長工藤保次郎に交渉したが受け入れられなかったため、青年数名が先頭になって郷蔵を破り、中から米を取出して部落民に分配したのである。

村長は怒り、ただちに警察部隊の派遣を要請、二十日は大勢の警察部隊が主謀者逮捕に嘉瀬村を取り囲みました。

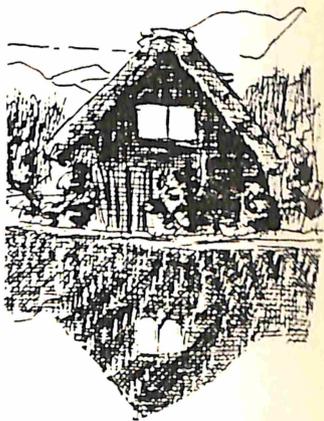
また、警察部隊に味方した村長派の中には「百姓を殺してやる」と、日本刀をふりまわし農民に乱暴した人もありました。

農民たちは、昼間は豆畑などにかくれ、夜になっても家に入れず、家で眠ることもできません。このため、せっかく分配された米を炊いて食べないうちに取返された農民が大半をしめました。

この事件のため、旧盆の盆踊りは取りやめることになりました。

○ 薬師さまの馬競争

明治三十七年頃、嘉瀬村の東(現在の東町りんご園の中)に薬師神社があり、村人は小栗崎の薬師さまと呼んでいた。そこには、大きな馬場



が設けられ、旧四月八日の例祭には盛大な競馬が行われたものでした。

この競馬は、「ダク」という乗り方で、騎手の背中に色彩鮮やかな旗を立て、馬を美しく飾り、走るだけでなく、騎手の乗馬姿勢や馬の足運び方に重点をおき採点するという、田舎では珍しい行事なので、近郷近在から大勢の見物人がきて賑いました。

この行事は、飯詰高館城主が馬産奨励のため、年々催せしめたと言いつたが、喜良市の湯の沢に伝わる落武者の伝説と関連があるのだ、と云う人もあります。

しかし、この盛況を極めた競馬も明治末期からすたれました。それは「薬師さま、馬場の敷地、山林十七町歩は私のものだ」と当時の村長は、小栗崎部落民から取り上げてしまったのです。

薬師神社は現在観音山の中に移転されております。

○ 運動会帰りの水難事故

大正七年五月十七日(旧四月八日)、嘉瀬尋常小学校の運動会が中柏木野(清久溜池の南岸、りんご園のある附近一面野原で、小学校の運動会場となっていた)で開かれました。

午後三時、運動会終了近く酔った村人たちが、そろそろ帰りかけていました。

秋谷文五郎(二三) 太田留吉(二三) 伊藤留吉(二二) 山中文一(二二) 伊藤文長(二二) 若者五人は、キッツ舟で溜池を渡って帰ろうとしました。当時キッツ舟で溜池を往復していた。キッツはワラビの根から澱粉をとるために使ったもので、水を何回もかけて使うので大きな丸太を掘り抜いて作ったもので舟のような形をしていた。又、馬の餌箱にも

六年七月に中里町で二〇、七キロ全線開通しました。

明治時代、どこかの線を走ったお古を買い入れた客車でありましたが、嘉瀬の人々をはじめ沿線の住民は、旗行列でこの開通を喜んだものでした。客車は今のよう真ん中に通路がなく、全部長いイスで入口に一つ一つ戸がついていて、戸口をあけてイスに坐るのです。

座席は、五・六人掛けでタテに歩けず、カニのように横になって出入りするので、カニ汽車といわれました。冬になるとイス席の中央部にダラムストーブを取付け、夕方にはランプが灯されました。

しかし、鉄道が通って交通が便利になった反面、村人の買い物は村を素通りして金木や五所川原へ出るようになり、村はしだいに取残されさびれていくようになりました。

○ 馬草刈の死傷事件

昭和十年七月三日午前十時頃、鳴戸橋附近において嘉瀬今健造さん(当時三十五才)が、馬草を刈っていたのを原野廻りの蒔田部落白川某に発見された。耳の遠い今さんは、白川の「馬草を刈うな」の声も聞こえず、草刈りを続けたため、怒った白川さんはトロッコ線路の切端で、今さんの頭をめった打ちにした。今さんは三上病院に入院したが、五日死亡した。

(註 原野(ヤツ)廻りとは、秣(マグサ)場の監視人のこと。)

(嘉小百年歴史より)

キッツを使用した。

五人を乗せたキッツ舟が溜池の真ん中まで来たとき、突風のような強い東風(ヤマセ)に煽られ、舟は大きく傾斜、酔っていた五人は重心を失い舟は転覆してしまいました。

運動会場は大騒ぎとなりました。直ちに木村担導さん(前妙光庵々主)らが救助に向かいました。途中でこのキッツ舟も転覆してしまい、二重遭難となりましたが、木村さんらはすぐ救助されました。

伊藤留吉、伊藤文長の二人が四〇分後ようやく救助されましたが、秋元文五郎、太田留吉の二人は午後四時水死体となって発見されました。山中文一さんだけは、羽織に長靴のスタイルで五〇〇メートル離れた北側岸までゆうゆう泳ぎつき、村人を「あっ」といわせました。

○ 流行性感冒の蔓延

大正七年十一月、嘉瀬村に流感が蔓延しました。

沢山の村人が避難病院(隔離舎)のことで、現在の新町沢田巳之七さん宅附近にありました)に入れられ、約百五〇名の村人が亡くなりました。

村では毎日のように葬式が続きました。昨日まで元気で葬式の手伝いしていた人が、今朝になって急に高熱をだし、死んだ人もありました。

一日最高八つの葬式ができました。当時死人は薪木を積んだその上に棺をのせ、ダビにしたものですから、ダビの煙は毎日幾本も燃えあがり、村の空を暗く覆い、村人を恐怖に震いあがらせました。

○ 津軽鉄道の開通

津軽鉄道の開通は、昭和五年七月十五日五所川原―金木間が開通、同

○ 金木村が町に昇格

北郡金木村にて、昨年十二月十二日、村会を開き、村を町とすることを決議し、許可の申請中なりしが、いよいよ本日、紀元節佳節により改称するよう許可せられたり。

金木町は大正七年現在、戸数七百二十七戸、人口二千四百九十七人を有し、これを各種の業体に区別すれば、農業四百三十四戸、商業百十八戸、工業五十戸、官公吏教員その他諸業、被雇人を合して百二十戸、商家軒を並べ警察分署、区裁判所出張所、郵便局および小林区署等あり、その他穀物、ワラ工品検査所、巡査駐在所、村役場等の諸官衛および小学校四校、神社三、寺院四、宣教師一を算し、その一カ年における生産および移出入の状態は、生産額七十二万六千余円、移入高百三十五万三千余円、移出高三十七万一千余円を示し、郵便電信の引き受け、および配達の状況においては、引き受けに属するもの通常および小包郵便物約二十三万七千余通、電報一万五千通、その配達に属するもの通常および小包郵便五万七千余通、電報約三千五百通なり。

しかして、同村人口は、大正六、七年度において他地方産業の好況に乗じ、一時出かせぎ人大かりしたため、多少の減少をみるにいたりたるも、八年より戸数、人口ともまた増加し、役場事務のごとき郡内首位を占め、需要供給の途円滑に、商業股賑、諸般の設備整い、町勢の体裁において欠くところなく将来、ますますその発達をみるべし。

(東奥日報 大正9・2・11)

○ 馬力大会のはしり

東青牛馬商組合発起にて、本日午前九時、市外造道馬見所（公園隣）に、地方の馬匹約百頭かり集めて、面白き競争をなさしむ。

その方法は、荷馬車一台に米二十俵ずつ敷きて、その上を引き競わしむるにて、距離二十間とし、一等より数等まで賞品を呈するものなるが、地方にては初めての催しなれば、馬好きは見物に行くことなるべし。

（東奥日報 大正7・3・13）

○ 金木競馬場開設

西北産馬組合にて設立計画中の津軽地方唯一の金木競馬場は、一時、組合と地元金木町との間に、多少の行き違いを生じ悩みたるも、その後、津島源右衛門氏の尽力により、円満解決し、鳴海畜産翁および古川副組合長、中谷代議員は、本月上旬より晴雨にかかわらず現場に詰め切り、熱心に人夫を督励、工事に着手の結果、外囲い、土塁はほぼ出来上がり、木柵および建物用材も小林区署と交渉まとまり、目下、運搬中に付き、予定の津軽地方農家の田植えサナブリ休みごろ、すなわち、七月三、四日には第一回の挙行をみるに至るべく、全部の工事は本年中に完成を至るべし。

（東奥日報 大正四年五月十九日）

東奥日報

（注）同競馬場は、予定通り七月三、四日の両日、開場式を兼ね第一回の競馬会を催した。完工式は大正五年七月一日。

○ 県内で一時間ごとに四人生まれ二人死ぬ

毎年四万人ぐらいの人口が増加している青森県は、約二万の死亡者を見てゐる。

大正十五年度の出生者は三万九千六百三十三人、死亡者は二万四百四十一人であつて、一日平均実に百八人の出生者を見てゐる。さらに、これを一時間ごとにとみると、出生者は四人、死亡者は二人、十三分三十秒の人間が呱呱（こ）の声をあげ、二十六分ごとに一人の人間が、あの世を慕つていつてゐる。これを見ても、実に人間の命は、朝露のごとく悲しく、喜びはまた利（せつ）那の瞬きではないか。

（東奥日報 昭和2・10・31）

○ お歳暮品の値段

▽白砂糖裝飾袋付一斤入十八錢五厘、二斤入三十六錢、三斤入五十三錢、五斤入八十六錢

▽浅草ノリ上美箱二帳入二十四錢、三帳入二十四錢、三帳入三十六錢、五帳入五十錢

▽ワサビづけ大曲物入大々三十五錢、大三十錢、並二十錢

▽ビスケット七半入二十二錢、一斤三十錢

▽金平糖五斤入七十三錢

▽落花生五斤入六十錢

（東奥日報 明治35・12・21）

我が日本国の有史以来の年号（元号）

制定に就いての一考察

外崎 三千男

一、年号の創始

紀元一三〇五年六月十五日我が国第35代の皇極天皇（女帝）の六月十五日、朝廷に於いて奸賊蘇我入鹿を誅戮した許りでなく、更に誅伐軍をその父蝦夷の邸宅に差向けた所、蝦夷すでに自殺してあったので一切の新政治改革も、順調に行われるようになり、その第一歩として年号を制定することになった次第である。

従来の紀元一三〇五年の六月十五日を以て大化元年とした。以後「白雉」「朱鳥」「大宝」と続き今日まで缺落なく総数二四二の年号が制定の多きに上がっている。

二、年号の年数

同じ年号の最も長いのは昭和の64年と明治の45年である。これは明治天皇が「一世一元」を制定された為で、以後もそれに則るわけでご承知の通りであるが、一世一元の御代がないわけではなく、調べると(37)齊明、(43)元明、(47)淳仁、(51)平城、(52)嵯峨、(53)淳和、(56)清和、(57)陽成(58)光孝、(59)宇多、(63)冷泉、(65)花山、(67)三条、(77)後白河、(85)仲恭、(92)後伏見、(101) 弥光、(109) 明正、(117) 後桜町、の御代だけが一世一元で他の御歴代は、総て二元或は三元の年号を制定し、最も多いのは(96)後醍醐

天皇の御代には「元応」「元享」「正中」「嘉暦」「元徳」「元弘」「建武」「延元」の八元という御歴代最多の年号改定に及んだという記録持ちの天皇で、御在位年数21年間に八元も改号に及んだという大記録の持ち主である。

それに崩御の御年は56歳という余り長寿ではない御在世中の改号は波瀾万丈の御在世が偲ばれて、感慨も無量である。

三、年号に使用された文字

(1) 最多使用文字——上に付くもの

「天」の字の付くもの「天慶」など27種に及んでいる。

「嘉」の字の付くもの「嘉永」など11元

「寛」の字の付くもの「寛永」など14元

「永」の字の付くもの「永延」など15元

「延」の字の付くもの「延喜」など11元

「建」の字の付くもの「建武」など9元

「正」の字の付くもの「正平」など13元

「文」の字の付くもの「文化」など15元

「大」の字の付くもの「大化」など6元

「長」の字の付くもの「長曆」など11元
「元」の字の付くもの「元弘」など15元
「明」の字の付くもの「明治」など4元
最多使用文字——下に付くもの

「永」の字の付くもの「応永」など11元
「延」の字の付くもの「万延」など4元
「安」の字の付くもの「応安」など9元
「和」の字の付くもの「昭和」など17元

「元」の字の付くもの「保元」など6元
「曆」の字の付くもの「延曆」など15元
「徳」の字の付くもの「宝徳」など7元
「仁」の字の付くもの「弘仁」など8元
「治」の字の付くもの「明治」など18元
以上の通り年号の全部に亘ることは、記述の余白もないので以上で終わることにする。

○あまり高価な自転車

自転車は青森にも流行して来ているが、やがて朝顔の花とともにしほむ一時の流行であろう。青森は自転車を要するほど市街は広いでもなく、またそれを利用せざるべからざる程業務についての機敏を感じておるわけでもない。見はえのためか、ちよいと運動のためにやるとかいうような意味からしては長く続くものではない。

またかくのごとき意味からするに於ては自転車はあまりに高価なものである。まず八十円以上くらいのもでなければ乗心地はよくない。百円内外の金ではあまり出しやすい額でもない。

実務に接近してその功績の見えるまで自転車の利用は進歩せば続くけど、青森ではその辺まで進歩しないうちに流行の力は減退するであろうと思われる。||略||

散歩などしている時、後ろからチリンチリンとやられるのはウルサ

イものだ。時には癩(しゃく)にさわる時もないでもない。チリンチリンのベルはただ注意を与うるのみの音と乗り手らは心得るがよい。避けよ、避けの音と心得て横柄な顔して通り抜けるのがよい。
四肢以外の利器を用いて自分の身体を運ぶものは普通の歩行人に迷惑をかけないように自分から避けて行くのがよい。

(東奥日報 明治34・8・25)

○青森署に初の自転車

今回東官殿下行啓につき警察にては特に機敏の取り締まりを要するよしにて、自転車二台を講求することとなり、過日の県参事会にてこれが費用を決議したれば、これを青森警察署に備え付け目下練習中なるが、この自転車は殿下の行啓の際は各地に回して使用する都合なるやにて、おいおい各警察署に備え付ける当局者の見込みなりという。

(東奥日報 明治35・5・29)

附

録

(第3集より第7集まで残部があります。)